

長崎代官末次平蔵四代の系譜

本馬 貞夫

はじめに

今年2度ほど『延命寺開創四百年記念誌』『延命寺の歴史』執筆のために高野山を調査した。延命寺は真言宗御室派の寺院である。

高野山へ登った人々の多くは奥之院を訪れ、鬱蒼とした杉の大木と、膨大な数の墓碑群が両側に続く約2kmの参道を歩む。御廟橋の向こうは、脱帽、撮影禁止の特別な聖域となっており、そうした聖域を通り抜け、弘法大師の御廟に上がって参拝する。

その特別な聖域の一面に「長崎墓」と呼ばれる、長崎の人々の石塔が並んでいる。時期は江戸前期から明治・大正にかけて、総数は36基ある。このあたりにある墓石では長崎墓が一番多く、高野山でも不思議に思われている。その詳細は『延命寺開創四百年記念誌』をお読みいただきたい。

長崎墓造塔の経緯を知るため、延命寺の紹介で、墓域を管理している清浄心院を訪れ、宿泊して関連史料を見せていただいた。清浄心院は高野山別格本山の塔頭寺院である。もともと長崎と高野山奥之院を結んでいたのは、智莊嚴院という高野山壇上伽藍のすぐ傍にあった塔頭寺院であった。

江戸時代には智莊嚴院から代僧・使僧が長崎に派遣され、延命寺境内にあった高野庵を拠点に信徒の家をめぐっていた。その智莊嚴院は明治初年に整理され、清浄心院に編入されて今日に至っている。中心となる史料は「肥前国長崎諸檀越過現名簿」・「長崎市日月牌名簿」と題された折り本15点で、そのうち江戸から明治初期のものは智莊嚴院に伝えられたものを引き継いでいる。

ここで取り上げるのは「肥前国長崎諸檀越過現名簿」第一、同第三という江戸初・前期の過去帳である。周知のとおり長崎の町々は、寛文三年（一六六三）の大火により金屋町・今町・出島町を除いて灰燼に帰した。当然のことながら当時の記録類は焼失し、紙史料はほとんど残っていない。したがって「肥前国長崎諸檀越過現名簿」は、大火以前の確実な史料として、史料的价值は極めて高いと思われる。

「名簿第一」の表紙をめくると「高野山智莊嚴院主政印時代從寛永十三曆肥前国彼杵郡長崎諸檀越石塔・日牌・月牌造立之過去帳」とあって、江戸時代初期にさかのぼる長崎の情報知られる。そこには、およそ寛文年間（一六七〇年ころ）までの名簿が記されているようだ。ここでの年号・月日は命日であることがほとんどで、実際に石塔・位牌を建立した日付は、それが明記されているとき、登山（高野山に登る）の日付、ということになる。まず、町年寄の例をあげよう。

○石塔并日牌 施主高嶋四郎兵衛殿自身登山時為母儀立之、

命日寛永十五年正月五日

○日牌 施主高嶋四郎兵衛殿自身登山時為内儀立之、

命日寛永十九年八月五日

折り本の最初の見開き部分に高島四郎兵衛自身が登山とあって、寛永の終わりから正保・慶安のころ（一六四〇年代）、自ら登山して母のために石塔と日牌を建立し、妻のために日牌を立てている。同じ頃、町年寄・高木作右衛門宗能は、寛永十八年（一六四一）三月晦日に没した父忠次の菩提を弔うために浅井六兵衛を使者として登

山させ、日牌を立てている。

さて、本稿に直接関係するのは次の部分である。

○逆修日牌 末次平蔵殿登山之時承応二年十月晦日立之、為自身

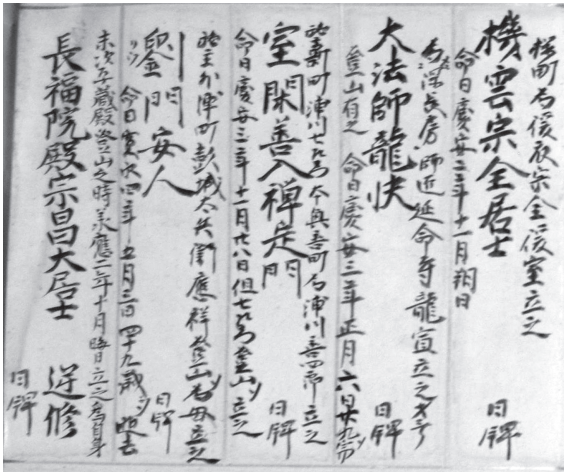
「長福院殿宗昌大居士」 (第一所収)

○逆修(日牌) 御施主長崎末次平蔵殿登山ノ時立之、

承応二年十月晦日

「長福院殿宗昌大姉」 (第三所収)

すなわち、承応二年(一六五三)十月晦日末次平蔵が登山して、右の逆修日牌を立てたというのである。この史料が「末次平蔵」に取り組みきっかけで、その分析については後述したい。



過現名簿第一逆修日牌 末次平蔵 (左端)

一、「末次平蔵」四代の略系譜及び関係史料

これまで末次平蔵については、四代の系譜が確定しないまま朱印船貿易研究の一環として取り扱われてきた。最近の研究で、二代平蔵は茂貞であるとされ、筆者もそのように考えるが、ここで先行研究と史料を精査して、平蔵四代の系譜全体を明らかにしたい。

1 川島元次郎『徳川初期の海外貿易家』(大正五年)

(京都建仁寺両足院過去帳、末次氏墳墓3基の調査)

雲證院殿華嶽淨高居士 寛永七庚午年五月二十五日 末次不干祖父
父

智勝院殿天桂永寿大姉 元和二丙辰四月二十一日 末次不干祖母

永安院殿通玄宗徹居士 正保四年丁亥九月十二日

(墓碑中央) 永安院殿通玄宗徹居士 正保四年

(墓碑右) 皆春院殿昨非不干居士 寛文九己酉年閏十月二日

(墓碑左) 香林院殿月桂永昌禪定尼

〈略系譜〉

末次興善 雲證院淨高 初代平蔵父 智勝院 初代平蔵母

初代平蔵 永安院宗徹 香林院 初代平蔵妻

二代平蔵茂房 皆春院不干

↑(諏訪神社鐘銘)「末次平蔵茂房 慶安四年」

明治四十三年(一九一〇)、大阪朝日新聞社一万号記念の懸賞論文、史伝分野「徳川初期の海外貿易家」募集において、川島元次郎の論文が第一等に当選した。その論文(前編)に加えて後編を執筆し、大正五年(一九一四)に刊行されたのが本書である。

末次氏については歴代の基本史料に当たりながら、長崎の歴史に
関する知識に乏しく、この系譜は的是がはずれている。しかし、建仁
寺両足院と末次氏の密接な関係を明らかにしたのは誠に素晴らしく、
おそらく学術的に初めて長崎代官末次氏を紹介した論考であろう。
末次氏に限らず、地方に散在していた朱印船貿易家（大名・貿易
商人）子孫の史料を探索してまとめた本書は、朱印船貿易について
の基礎研究であると評価されている。

2 古賀十二郎「名家墓所一覽」

建仁寺両足院過去帳及び末次氏石塔調査から
（大正九年四月二十九日取調）

【法名】

【没年月日】

雲證院殿華嶽淨高居士 寛永七庚午年五月二十五日

月牌入 末次不干祖父

智勝院殿天桂永寿大姉 元和二丙辰四月二十一日

石塔ナシ 末次不干祖母

永安院殿通玄宗徹居士 正保四年丁亥九月十二日

（五輪塔図） 末次不干父

香林院殿月桂永昌禪定尼 寛永三丙寅五月二日

（石塔図） 末次不干母

皆春院殿昨非不干居士 寛文九己酉年閏十月二日

（石塔図） 末次不干（茂房）

大正八年（一九一九）から始まった長崎市史編纂業務において、
古賀十二郎は風俗編のみならず貿易分野も担当していた。当然『徳

川初期の海外貿易家』は手許にあつて目を通したはずである。現在、
長崎歴史文化博物館蔵古賀文庫には同書が架蔵されている。大正九
年に行われた両足院のこの調査ノートは、過去帳の閲覧が制限され
ている今日、とくに貴重な史料提供となつている。

古賀のノートには、末次不干とその父母、その祖父母、計5人の
法号、及び末次不干とその父母3基の石塔がはつきりと記されてい
る。末次氏四代の系譜は、これで概略明らかになったとみてよい。
ちよつと気になるのは「末次不干」の表記で、末次茂房ではなく号
の「不干」が表面に出ている。「不干」の表記は他の史料でも見うけ
られる。

3 川島元次郎『朱印船貿易史』（大正十年）

【建仁寺両足院の末次関係資料は『徳川初期の海外貿易家』と同じ】

○長崎春徳寺の墳墓3基、五輪塔の形全く両足院に同じ

（右）永安院殿通玄宗徹居士 正保四年丁亥九月十二日

（中）瑞光院殿寿岩浄永大姉 寛文九己酉十月十九日

（左）不明

○春徳寺過去帳

雲證院殿華岳淨皎居士 寛永七年五月二十五日、永安院殿先考

俗名末次氏

智勝院殿 元和二辰四月二十一日

永安院殿通玄宗徹居士 正保四丁亥九月十二日

瑞光院殿寿崑浄永大姉 寛文九酉十月十九日、末次平蔵妻

長福院殿道寿宗心禅尼 末次氏母

（略系譜）

雲證院	初代平藏政直	その妻	智勝院
永安院	二代平左衛門茂貞	その妻	瑞光院
皆春院	三代平藏茂房	その妻	香林院
	後妻	長福院	(四代平藏母)

大正八年(一九一九)長崎高商教授として赴任した川島元次郎は、先の『徳川初期の海外貿易家』を改訂・増補し、建仁寺両足院の史料に加えて長崎春徳寺の調査結果を合わせ考察したものを『朱印船貿易史』の「末次平藏」の章に記した。勿論『徳川初期の海外貿易家』の誤りは訂正されている。この著書上梓の前から川島・古賀両氏ともに長崎市史編集委員として同席していたが、細部の情報を交換した形跡はなさそうだ。

春徳寺は寛永七年(一六三〇)に立山の地に開創し、その後寛永十七年(同二十年「長崎名勝図絵」)に大檀越末次茂貞の資力をもって現在地に移転、諸堂が建立された。山号の華嶽山は初代平藏政直の法号に依る。

境内裏手に3基の末次墓が現存しており(移転されてきたもの)、一番大きな五輪塔には、「永安院殿通玄宗徹居士 正保四年丁亥九月十二日」が刻まれているとあるが、肉眼では全くわからない。中の五輪塔の「瑞光院殿寿岩浄永大姉 寛文九己酉十月十九日」は今日でも読むことができる。左の五輪塔には文字の痕跡が見うけられない。

また、過去帳「瑞光院」のところにある「末次平藏妻」、「長福院」の「末次氏母」は、どう解釈すべきであろうか。後ほど言及したい。なお、川島元次郎は大正十一年十二月に死去、長崎市史編纂事業にとっても惜しまれることであった。

4 福田忠昭・丹羽末廣校閲「長崎名家略譜」 『長崎叢書』大正十五年)

末次氏(略系譜)

末次平藏政直 初め金屋町乙名たり、元和二年町年寄と謀り村山東安を幕府に訴ふ、東安刑死するに及び長崎代官に任ず、寛永七年罷む

平藏茂房

寛永慶安間人、長崎代官たり、島原耶蘇乱の時平藏自ら江戸に至り事を議せんとす、蓋し賊徒長崎を襲ふの説あるを以て之を避けんとする也、町年寄高木彦右衛門大に之を恥ぢしむ故を以て平定の後町年寄皆賞賜有るも平藏獨り賞無し

平左衛門茂貞

平藏茂朝

慶安承応年間の人長崎代官たり、寛文四年天草四万石を管す、家甚だ富む、延宝四年密に商船を諸国に遣るに座し家財を没入し隠岐に流され一家皆放流せられ家断つ

長崎市史編纂事業の一環として刊行された『長崎叢書』に末次氏系譜の記載がある。これは明治前期の長崎県官僚にして歴史家と云つてよい金井俊行の著書「長崎年表」及び附属資料をほぼ採録したもので、大半は信頼に足る歴史書である。しかし、ここには、これまでの「2 古賀」「3 川島」の調査・研究は反映されておらず、江戸時代の伝承・古記録を集めた著作物である「長崎圖志」・「長崎名勝図絵」その他に登場する「末次」の記述を参考にしたと思われる

る。それらの内容は、春徳寺の移転・建立に関して平蔵茂貞が記され、寛永年間とされる龍頭巖や山王権現の逸話・伝承には平蔵茂房が登場し（後述）、総じて二代茂房説が有力視されたようだ。江戸後期の長崎において、平蔵茂房の印象が強かったことを物語っている。『長崎叢書』の二代平蔵茂房説は、『平戸オランダ商館の日記』や『オランダ商館長日記』の注釈にも影響していたし、一方二代平蔵を茂貞としても、茂房を飛ばして茂朝まで「三代にわたる末次平蔵」とした著作もあった。このように、これまで二代平蔵と三代平蔵は混乱していた。

5 古賀十二郎『長崎開港史』（一九五七年）

〈略系譜〉

末次平蔵政直 寛永七年（一六三〇）五月二十五日

江戸において卒す

末次平左衛門茂貞 正保四年（一六四七）九月十二日

京において卒す

末次平蔵茂房 寛文九年（一六六九）閏十月二日卒

末次平蔵茂朝 延宝四年（一六七六）隠岐流罪

古賀十二郎が、長崎開港時から江戸前期にかけての概説を若い人向けに書いたもので、かつての両足院調査がストレートに記述されている。

6 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』

（第二輯・第三輯 一九六九年）

〈日記から抜粋した略系譜関係史料〉

一六三〇年九月 平蔵はこの一二、三年間、息子と逢って話そう

とはしなかった。彼は友人のとりなしで、平蔵の死ぬ前に江戸に呼ばれ、ここで父の官職と世襲の領地を、遺言状により全部譲り受けた。

一六三四年十一月 「以前私の父の所で、面倒と不和が起こった。

しかし今は私の時代である」。

7 『オランダ商館長日記』

（東京大学史料編纂所 一九九一〜二〇一五年）

〈日記から抜粋した略系譜関係史料〉

一六四一年六月 我々は執政官フエゾ（平蔵）殿の家にも来たが、

同人はその病気のため今なお市外におり：

一六四三年八月 代官平蔵殿の息子

（彼は皇帝陛下の命に依り父の跡目を継いだ）

九月 若い平蔵殿（彼は現在陛下への御奉公を免ぜられ

空席となっていた彼の父の職に就いた）の屋敷に赴いた。

一六四六年十二月 平右衛門殿、以前は平蔵と称し、前の長崎の

（京にて）

執政官で、今はその息子が彼の地位と名跡を世襲している、の使者が、「彼は」重い病気なので、もしあればいくらかアメンドウを欲しい、…という依頼を持って来た。

一六四七年二月 平左衛門殿すなわち前の長崎の執政官平蔵殿

十月 彼「平蔵殿」は、死の床にある彼の父親を、京へ訪ねる必要があった。

一六四八年二月 この町の執政官平蔵殿は、私の帰着の十四日前に落馬して脚を骨折し、医者がいなかったため、それによって非常な苦痛を感じており、我々の外科医に手当てに来てもらえるか、と求め、…彼が病気の父親を見舞って京にいた時、彼「父」はあの時亡くなったのだが、…

一六五〇年二月 執政官平蔵殿も、彼の職務を兄弟に引き継ぐために近日中に長崎へ出発しようとしている。何故なら、脚の骨折のせいで困難となったのでそれ「職」を辞していたからである。

一六五〇年九月 今年兄の地位を継いだ若い執政官の平蔵殿

7と8のオランダ商館日記に登場する末次平蔵について、その親子・兄弟の関係をみると次のような末次の系譜になる。

一六三〇年、末次平蔵は死去する前に、江戸に息子呼び、代官職を譲った。父は初代政直である。息子の二代平蔵は、父のときオランダ側と起こした面倒と不和に対して、一六三四年「今は私の時代である」と全権掌握を誇示し、父の時代の摩擦にはこだわらない旨を示した。摩擦とはタイオワン事件のことである。

一六四一年ころから平蔵は病気にかかり、一六四三年息子の跡目を譲って「平左衛門」を名乗った。平左衛門（前の長崎執政官平蔵）は京都に移り、そこで死去した。息子の三代平蔵は一六四七年「死の床にある彼の父親」を見舞うため京都に上った。

一六四八年二月、落馬して脚骨折の重傷を負った三代平蔵は、オランダ商館医の治療等を受けたが回復せず、職務が十分に果たせないと考えて、一六五〇年弟に代官職を譲った。兄から代官職を引き継いだ若い平蔵が四代目ということになる。

オランダ商館日記が示す初代平蔵の没年は一六三〇年、二代は一六四七年で、三代平蔵から四代への引き継ぎは一六五〇年となっている。

8 山脇悌二郎『抜け荷』（一九六五年）

〈略系譜〉

初代平蔵政直

二代平蔵茂貞

三代平蔵茂房

四代平蔵茂朝（茂房弟）

後に『長崎のオランダ商館』を上梓した山脇悌二郎は、オランダ商館日記の記述をそのまま史実としてとらえた。かつてオランダ商館と初代平蔵は、タイオワン事件で衝突したが、その後オランダ商館側が代官（執政官）平蔵の血縁・系譜をゆがめて記すことはありえない、記述を疑う必要はないと考えられる。つまり、茂房と茂朝は兄弟である。

9 奥村武「長崎と博多商人」（長崎談叢第五〇輯 一九七一年）

〈略系譜〉（「末次平蔵家々系略譜」を簡略にしたもの）

末次孝善（興善） 寛永十四年八月十日卒

（法名）秋林道仲居士

初代平蔵政直 寛永七年丁午五月二十五日卒

（法名）雲證院殿華岳浄皎居士

（室）知勝院殿天桂永寿大姉 元和二丙辰四月二十四日卒

二代平蔵茂貞 正保四年九月十二日卒

（法名）永安院殿通玄宗徹居士

（室）瑞光院殿寿崑浄永大姉 寛文九年十月十九日卒

三代平蔵茂房 寛文九年十一月二日卒

（法名）皆春院殿昨非不干居士

（室）香林院殿月桂永昌禅定尼

（次室）長福院殿道寿宗心禅定尼

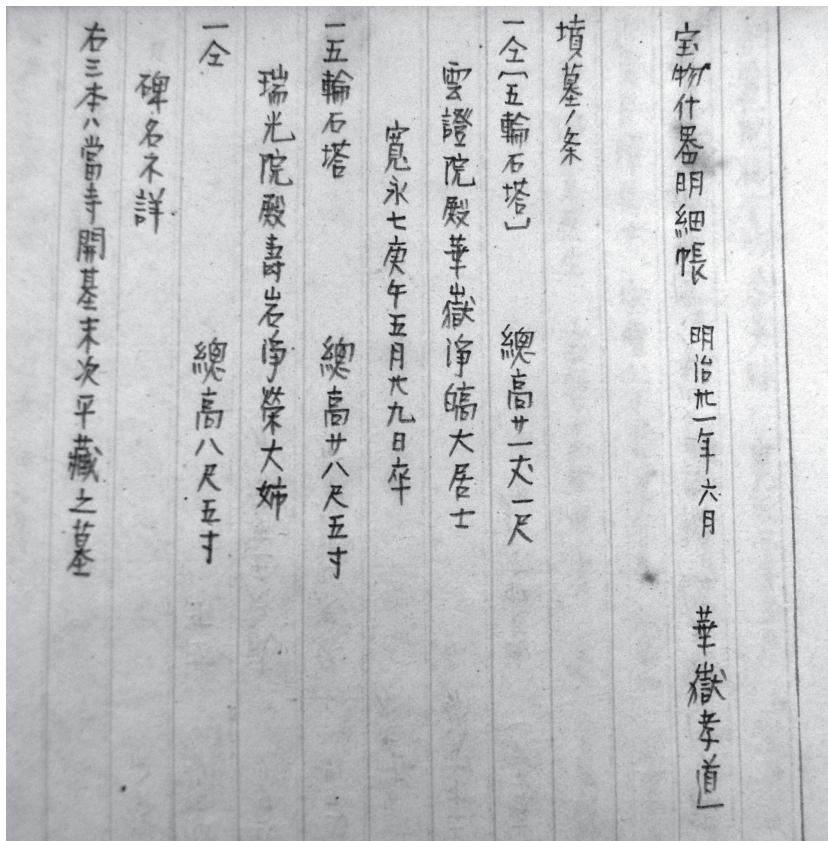
四代平蔵茂朝

平兵衛

論文のタイトルにあるように、末次氏を代表的な博多商人の系譜に位置付け、大賀氏、神屋氏、伊藤氏、磯野氏などの家系を調査するなかで、末次家の墓地、過去帳、寄進などをもとに子孫宅に伝えられている系図も併せて「末次平蔵家々系略譜」を作成したものである。著者の奥村氏自身博多商人のご子孫筋にあたる。気になるのは寛永十四年卒の「末次孝善」を、平蔵政直の父興善としているが、実証性にやや疑問が残る。

10 渡辺庫輔ノート「春徳寺宝物什器明細帳」 墳墓ノ条

（右）五輪石塔 総高サ一丈一尺



雲證院殿華嶽浄皜大居士 寛永七庚午五月二十九日卒

（中）五輪石塔 総高サ八尺五寸

瑞光院殿寿岩浄榮大姉

（左）五輪石塔 総高サ八尺五寸

碑名不詳

右三本八當寺開基末次平蔵之墓

渡辺庫輔ノート

これは春徳寺で作成された「宝物什器明細帳」の一部に書かれたものである。右側の大きな五輪塔には「永安院」と刻まれているとした『朱印船貿易史』に対して、ここでは「雲證院」となっている。現在の石面は全く読めない状況にあり、並んでいる「瑞光院」の五輪塔を「永安院」の室（妻）とする解釈は見直しが必要かもしれない。そもそもこれら3基は、旧末次墓地から現在地に移設された五輪塔である。

11 越中哲也編『長崎春徳寺史』（二九八二）

〈略系譜〉

初代平蔵政直 (室) 知勝院
二代平左衛門茂貞 (室) 瑞光院
三代平蔵茂房 (前室) 香林院 (後室) 長福院
四代平蔵茂朝

これまでの諸説、とくに川島元次郎『朱印船貿易史』、奥村武「長崎と博多商人」を参照して、「末次家の墓所」がまとめられた。新しい知見として、龍頭巖を削ったのは、東海氏の墓普請に刺激を受けた四代平蔵茂朝の延宝年間ではないかと提起されている。茂朝と春徳寺については後ほど触れる。

12 江戸時代の歴史物

『長崎圖志』 龍頭巖 寛永中末次茂房、其ノ父政直、石椁(槨)

ヲ為ラント欲ス、而之ヲ創ニ、斧ヲ下ス之處、血ヲ流シテ淋漓タリ。見聞クモノ嘆異セザル莫シ。其ノ靈竟ニ鮮ク。又云、毎ニ天陰ニ遭、創痕特ニ或ハ鳴動ス、今ニ至テ尚ヲ然リ、實ニ本邑第一之風水ニ關カル、末次、驕奢淫佚ニシテ嘗テ之ヲ破ル、尤不利ト為、故ニ数世ナラズシテ家亡フ

『長崎名勝図絵』

末次茂貞、資を捐てて今の地蚕寺敗毀の趾に基を為して移し建つ、これ寛永二十年なり、乃ち旧号に因て華岳山春徳新寺と称す

寛永年中末次茂房其父政直の石椁(槨)を造らんと欲してこれを割るに其斧を下すの處血を流して淋漓たり(この後「圖志」の記述にほぼ同じ)
寛永十五年松平伊豆守源信綱島原の賊徒を征し通行の間此處を経て邑長末次茂房を顧みて曰く勝景叡山の下に似たり、地もまた坂本と称してたまたま名を齊ふす、よろしく山王を祀て可なりと

末次政直の子で二代代官を茂房としていたのは、これら近世後期の歴史物であった。末次平蔵事件のあと、長崎には末次氏を誹謗する風潮が続いていた。勿論史料としては十分吟味しなければ使えない。『長崎港草』も同様である。「末次平蔵滅亡」の項に平蔵の甥どもは「流落シテ乞食トナリ」とするなど末次氏に対する悪意がある。

二、末次平蔵四代の系譜作成

これまで検討してきた末次平蔵四代に関する資・史料と先行研究

をもとに卑見を述べ、四代の系譜（試案）を作成してみた。

系譜に関する史実をほぼ確実に表していると判断したのは、金石文、過去帳、オランダ商館日記と、四代末次平蔵（茂朝）の密貿易事件を記した長崎奉行所「犯科帳」である。重複するところもあるが整理しておく。過去帳については、古賀十二郎、川島元次郎の調査に依った。両足院の末次氏墓碑については、まだ調査の許可が得られていない。

ア 春徳寺鐘銘（部分） 慶安三年（一六五〇）

春徳新寺盡輪奐之美也、寺之英檀永安院通玄宗徹居士俗姓者謂末次氏平左衛門尉茂貞
〔長崎名勝図絵〕

イ 長崎諏訪大明神廟鐘銘並序（部分） 慶安四年（一六五二）

紫陽肥前州彼杵郡長崎松田久左衛門尉直重頓首百拝謹供ズ
梟氏 阿山助右衛門尉国久
子助三郎 国房 同鑄

末次平蔵 茂房

高木作右衛門尉宗能
高木彦右衛門尉重成
高嶋四郎兵衛尉茂貞
後藤庄左衛門尉朝貞

皆（時）

慶安四年歲次辛卯九月日向井道悦謹撰並書
宮司権大僧都金重院賢清

神主青木宮内大輔 永忠 〔長崎不二贊〕

ウ 両足院末次氏墓碑

（法名）

（没年）

（墓碑中央）永安院殿通玄宗徹居士 正保四年丁亥九月十二日
（墓碑右）皆春院殿昨非不干居士 寛文九己酉年閏十月二日
（墓碑左）香林院殿月桂永昌禅定尼 寛永三丙寅五月二日

エ 春徳寺末次氏墓碑

（墓碑右）永安院殿通玄宗徹居士〔朱印船貿易史〕

（墓碑中）雲證院殿華嶽淨皜大居士〔春徳寺過去帳〕墳墓ノ条

（墓碑左）瑞光院殿寿岩浄永大姉 寛文九己酉十月十九日

（墓碑左）不明

オ 両足院過去帳

カ 春徳寺過去帳

キ 高野山清浄心院「肥前国長崎諸檀越過現名簿」

ク オランダ商館日記

ケ 犯科帳 延宝四年（一六七六）

・末次平蔵母

長福院 辰二年六十三 辰三月二十五日大久保出羽守家来ニ預置

之

右長福院儀女之身として唐人ニ付合其上異国江抛銀いたし不届之
段令露頭



春徳寺 末次氏墓

四月二十七日老岐国江流罪被仰付之候
 ・末次平蔵 辰二年四十三 辰二月十八日松平右衛門佐家来ニ預置
 之
 右平蔵儀御代官をも仕ながら異国江致抛銀雖為重科陰山九太夫・
 下田弥三右衛門船仕出之儀は不存其上地方ニ私曲無之ニ付而死罪
 御赦免家屋鋪財宝坐御闕所四月二十九日隠岐国江流罪ニ被仰付候

・末次平兵衛 辰二年二十 辰二月十八日松平右衛門佐家来ニ預置
 之
 右平兵衛儀異国江船之仕出并致抛銀候儀も不存候得共依為嫡子父
 一所ニ辰四月二十九日隠岐国江遠嶋被仰付候
 ・末次平左衛門 辰二年二十五 辰二月十八日松平右衛門佐家来ニ
 預置之 同三月二十一日大村因幡守家来ニ夫婦一所ニ預置之
 右平左衛門儀陰山九太夫・下田弥三右衛門異国江船仕出し并抛銀
 等も不存候得共平蔵為名代諸事用に相勤候ニ付家屋敷召上之辰五
 月二日江戸・京・大坂・堺・奈良・伏見・長崎近辺追放之被仰付
 候

アの春徳寺鐘銘から言えることは、慶安三年時末次平左衛門茂貞
 は死去していた(永安院)、ということである。『オランダ商館日記』
 で判明したように「平左衛門」は茂貞引退後の名前(通称)。

イの長崎諏訪大明神廟鐘銘並序にある「末次平蔵茂房」は、この
 鐘製作の段階と考えてよく、慶安四年まで末次平蔵茂房を名乗って
 いたわけではないと思われる。しかし、慶安年間の茂房の存在を証
 明する確実な史料といえよう。

ウの両足院末次氏墓碑、オの両足院過去帳の考察は古賀ノート「名
 家墓所一覧」に全面的に依拠したいと思う。大正九年の調査なのに、
 どうしてすぐこの説が広まらなかったのだろうか。永安院(茂貞)
 は末次不干の父、香林院は不干の母と明確にされている。また、京
 都で病死した茂貞と両足院の墓碑には整合性がある。

茂房は脚の骨折のため代官職を弟に譲った後、いつからかはわか
 らないが、禅宗に帰依して「末次不干」・「不干居士」と号した。代
 官やめた、という意味なのか。「犯科帳」のところでも述べるように、

四代茂朝はおそらく元服したばかりの若さである。依然末次不干の存在は大きかったのかもしれない。

建仁寺両足院のホームページ「両足院とご縁の人々」によれば、末次不干は隠元・木庵の墨蹟及び盆石を両足院に寄付し、その目録とともに現存しているという。このことが『徳川初期の海外貿易家』・『朱印船貿易史』に詳しく記されているので、概略紹介したい。禅宗に帰依した茂房（不干）に対して、隠元は法号を授けた。

昨非 云是誠非是 知非却不非

隠元の法嗣である即非の流れに擬したものであるという。また、茂房が所蔵していた奇石に対して、同じく法嗣の木庵が「冠石」と題して銘を寄せた。

仙人霞作帽 子以石為冠 試抹将来看 両家錯浪傳

黄檗木菴題

末次不干は、これらを建仁寺塔頭である両足院に寄進した。

目録

- | | |
|---------------|----|
| 一 隠元禅師昨非二字横物 | 一幅 |
| 一盆石 大徳天室和尚号冠石 | |
| 并黒塗盆、白砂相副之 | 一箇 |
| 一 木菴和尚冠石二字横物 | 一幅 |
| 一 立圃冠石記假名物 | 一幅 |
- 右之諸色東山塔頭両足院常住物令寄進者也

萬治三年庚子二月中旬

肥之前州長崎住末次氏

以成西堂

侍衣閣下

昨非不干居士（花押）

万治三年（一六六〇）に茂房はこの文書で「昨非不干居士」と署名しており、すでに代官職を退いていたことは明白である。この当時彼は京都に居た可能性もあって、「皆春院殿昨非不干居士」と刻された墓碑も両足院に存在している。

エの春徳寺末次氏墓碑については、瑞光院は確実としても一番大きな五輪塔の文字が永安院なのか雲證院なのか、現時点ではわからない。拓本を取らせていただくなど精査は必要だろうが、永安院の墓は両足院にあり、ここは雲證院（初代政直）とした方が辻褄は合う。もともと春徳寺は、初代政直死去の年に開創された寺である。

カの春徳寺過去帳（『朱印船貿易史』）には、末次不干の法名記載がなく、一族すべてを記していないのは明らかであるから、瑞光院を永安院（茂貞）妻に固定する必要はない。「末次平蔵妻」は三代茂房（不干）、四代茂朝の可能性もある。

クのオランダ商館日記によって確定した末次四代の間柄を示す。

【初代平蔵 —（親子）— 二代平蔵 —（親子）— 三代平蔵 —（兄弟）— 四代平蔵】

ケ「犯科帳（延宝四年）」記載のいわゆる末次平蔵事件から言えることは次のとおり。まず、長福院と末次平蔵（茂朝）は母子関係、年は六十三歳と四十三歳、茂朝と平兵衛は親子関係、平兵衛の年は

二十歳である。すると、京都両足院に墓碑がある香林院は末次不干の母親であるから、長福院は平蔵茂貞の後室の可能性が高い。

さらに、延宝四年（一六七六）四十三歳の茂朝は、代官職を継いだ慶安三年（一六五〇）では十七歳の若者ということになる。いかにも若い。代官職四代茂朝の後見として、前代官の兄茂房の影響はなお大きく、また母長福院も大きな役割を果たしたと思われる。判決記録に「女之身として唐人ニ付合其上異国江抛銀いたし」とあるのは、政直・茂貞と続いた貿易・金融商人としての末次氏を、「抛銀」に象徴されるように長福院こそ濃密に引き継いでいたのではなからうか。

ここで、高野山清浄心院所蔵「肥前国長崎諸檀越過現名簿」記載の「末次平蔵」「長福院」をどのように解釈すべきか考えてみよう。承応二年（一六五三）に末次平蔵が登山して自身のため逆修日牌を立てたというのだから、年代的にも、また女性の長福院の逆修が同日に立てられていることからしても、この平蔵は四代茂朝とみてよい。二つの逆修の法名が、ともに長福院で、大居士・大姉なのは母子を示唆しているのではないか。

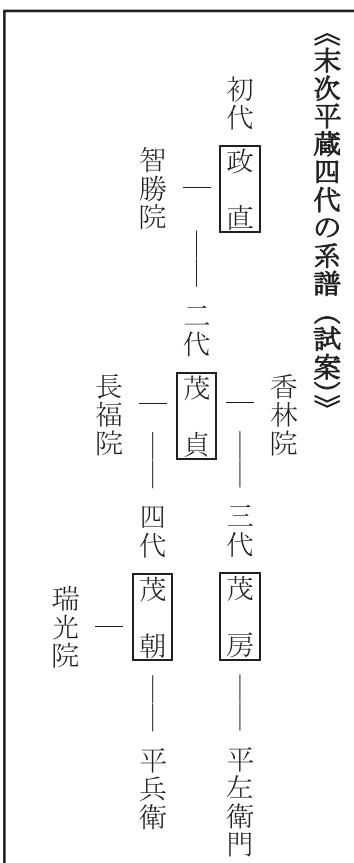
もう一人、「犯科帳」に出てくる末次平左衛門は「平蔵為名代諸事に相勤候」とあり、平蔵に極めて近い存在である。想像をたくましくすれば、不干の息子かもしれない。

末次一族として、墓碑・過去帳でその存在が確認できる女性も一人いる。寛文九年（一六六九）没の「瑞光院」である。犯科帳の末次平蔵事件をよくみると、茂朝の妻の名前がない。「追放」の平左衛門でさえ「夫婦一所」に預けられており、もっと重罪の者は妻子・親にも及んでいないから、離縁ということもあるが、この時茂朝

の妻はすでに死去していたと考えるのが妥当だろう。そうすると春徳寺過去帳にある瑞光院は「末次平蔵妻」、長福院は「末次氏母」という書き込みも容易に理解できるのである。

以上の事柄を図示すると、左の図のようになる。

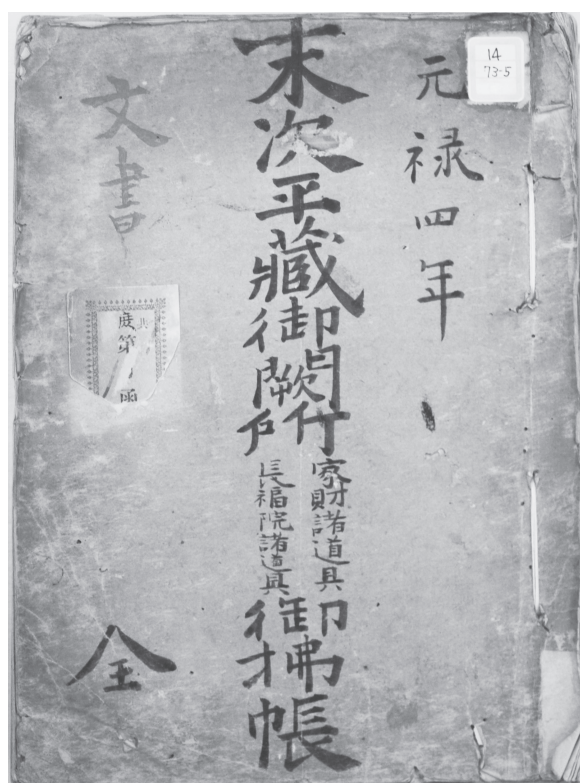
《末次平蔵四代の系譜（試案）》



三 「末次平蔵御闕所」目録について

末次系譜を少し展開して、末次の家がどのようなものだったか、内実を知る確実な史料から考えてみよう。「元禄四年 末次平蔵御闕所家財諸道具長福院諸道具御拂帳」・「元禄四年 末次平蔵御闕所道具刀脇指古筆御拂帳」（長崎奉行所関係資料 重文）は、資産については全容を表すものではないだろうが、とくに前者は長崎代官末次の家の日常生活、文化・芸道の傾向を表す好史料である。

延宝四年二月から三月にかけて末次一族は身柄を福岡藩・松江藩などに預けられ、四月に流罪となるが、その付加刑として闕所を申し渡された。この史料は末次平蔵と母長福院の家財・諸道具に対し、平蔵の家財・諸道具は一番から十九番、長福院の諸道具は二十番から二十三番に分けて入札が行われたことを示すものである。な



末次平藏御關所御拂帳 表紙

お、勝山町の家屋敷については高木作右衛門が貰い受けている。入札対象となった品目を見ると、日常生活用品、女性諸道具類、衣類・寝具、舶来織物類、墨書・絵画類、書籍類など当然のことながら多岐にわたっているが、これを長崎代官四代の権力者末次氏の系譜（試案）を念頭においてみてみたい。

最初の一から五番は末次の家の日常生活用品である。一番のリストから、いくつか上げよう。青貝文箱、高麗茶碗、高麗水指、青貝硯箱2、南京染付茶碗10、南京染付四角皿11、鼻目がね38、唐竹掛花入、釣舟花入、蒔絵ひやうたん茶弁当内二小道具入、竹茶弁当内小道具入、きやうそく（脇息）、阿蘭陀鉢、八角菓子盆、孫ノ手、染付小徳利など74口 代銀合わせて一貫四百六十目であった。

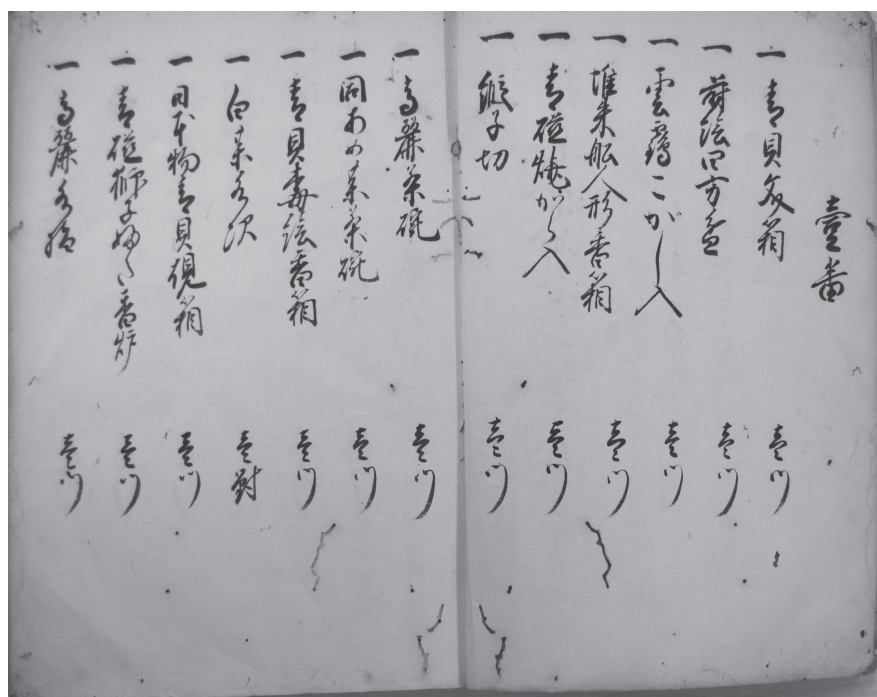
以下、二番54口 代銀一貫八百六十八匁、三番38口 代銀八百十匁、四番33口 代銀五百十五匁一分五厘、とあり、五番64口 代銀一貫六百十匁は、具体的に次のような品目である。唐蒔絵硯箱、蒔絵文箱、青貝四方香箱、菊絵赤塗盆4、薄茶ちやわん10、唐墨42、阿蘭陀遠目がね、唐櫛10、阿蘭陀はさみ10、唐扇子7、阿蘭陀鏡、小箆筒、ふらすこ3、ひいとろちよく3、黒塗中央卓、南蛮焼水指、ひやうたん釜、茶釜など。

六番は南馬町掛屋鋪一ヶ所、表口二間五尺三寸入十五間 代銀一貫七百十五匁。勝山町の代官屋敷から歩いて数分のところに位置する。以上七月朔日入札。

七番と八番は女性の持ち物が多く、中には嫁入り道具らしい物もある。七番42口 代銀二貫七百目、黒塗椀折敷10人前、二ノ椀折敷30人前、貝桶2但貝共二、蒔絵黒棚、ひいな道具色々、長持、梨地文庫、同硯箱、同ミだれ箱、同鏡台、蒔絵台天目、同はさみ箱、同手水手洗、同帯箱、蒔絵双六盤、琴袋入 等等。

八番36口 代銀六貫二百三十目、緋縹子蒲団、嶋縹子蒲団、縹子蒲団、嶋縹子夜着、緞子蒲団、金入緞子夜着、縹子薄小袖2、かこ小袖2、縹子小袖3、縹子帯1箱、白むく小袖、紫かのかこ小袖2、染小袖19表、女帷子4 等等。以上七月四日入札。

九番は末次屋敷の居間・仏間、納戸の品目という印象を受ける。86口 代銀二貫三百五十目。碁石一面分、南京ふた茶碗4、伊万里染付小壺、りうのふ（龍腦）錫、しんしや（辰砂）同、唐蒔絵梨地丸折敷10枚、瀬戸茶碗5、盃10、黒塗青貝椀5、染付大鉢3、南京染付ふた茶碗20、南京白手皿10、南京染付さしみ皿18、唐銅鍋、染付茶碗10、同皿10、ひいとろちよく10、染付ちよく40、同皿30、伊万里青磁花入7、同大香炉、同小香炉、観音絵掛物、銅椀台共二、



末次平蔵御闕所御拂帳 壹番

木魚、てしよく、へつかう火ともし、古六枚屏風一双半、つい立屏風、時計 等など。

十番 18口 代銀五貫二百六十目、十一番 15口 代銀七貫百三十目、

十二番 60口 代銀三貫八百七十六匁は織物類で、弁柄糸 45斤程、東京紬 9端、金巾 19端、弁柄奥嶋 14端、縹子色々 17端、東京縮綿 10端、茶宇嶋 4端など結構値が付いている。弁柄・東京といったインド・東南アジアの織物が目立つ。以上七月五日入札。

十三番 78口 代銀二貫八百六十五匁、十四番 90口 代銀三貫五百七十七匁三分は寢室・居間・納戸関係と思われるが、七月二十三日入札とあり、前回の七月五日から大分立っている。

十五番 84口 代銀三貫三百二十五匁、十六番 38口 四貫五百三匁には、気になる品目があつて沢庵和尚、小堀遠州、狩野探幽ら著名な人物の書画多数とともに、黄檗関係資料が並んでいる。木庵書跡 43枚、即非書跡 8枚、木庵墨跡 1幅、隠元墨跡 10幅、隠元掛物 9幅、木庵掛物 1幅、三筆物隠木即 1巻とかなり多い。

さらに、「長福院諸道具」二十番の中にも木庵・即非関係があつて、即非観音絵 1幅、即非一行物 1幅、即非墨跡 1幅、木庵川渡布袋 1幅、即非謨釈加絵 2枚、また二十二番に隠元絵 1幅、二十三番には隠元墨跡 6幅、木庵墨跡 4幅、即非墨跡 11幅、鉄牛名号 4幅、即非観音絵 1幅、鉄牛墨跡 3幅とあり、これも大変多い。鉄牛は木庵の法嗣である。

これらを何時何処で入手したかわからないが、隠元・木庵は長崎から摂津普門寺を経て山城の宇治萬福寺に住し、即非は長崎から宇治萬福寺へ上り、帰路小倉福聚寺の開創を経て長崎崇福寺で隠居・示寂した。末次不干が兩足院に寄進した隠元・木庵墨書の添書などがあれば興味深い、調査に至っていない。

十七番 69口 代銀五貫目、十八番 84口 代銀八貫六百八十目六分、十九番 148口 代銀八貫百二十七匁、以上十五番から十九番まで七月二十四日入札。末次家諸道具として、より高級な品々のようだ。一

方、十九番の吉野紙79束、奉書紙10束、鼻紙130束、大奉書8束、大杉原8束、唐紙7束、から紙5帖、から表紙1帖、いろ紙3帖、美濃紙1束といった紙類は印象的である。末次家の生活、代官の職務が垣間見える。

以上、十九番までの入札代銀は、七十一貫五百九十二匁五厘であった。

もう一つの「長福院諸道具」にも、二十番119口代銀三貫八百三十目、二十一番106口代銀三貫三百五十目、二十二番102口代銀六貫七百六十目、二十三番99口代銀三貫百八十目とあって、これらの合計は十七貫百二十目。七月二十一日から二十三日にかけて入札が行われた。

生活用品諸々、舶来織物類、黄檗資料以外に目に付いた品目をあげると、二十番に唐本四書5冊、くわふ(花譜)3冊、草さうし(草双紙)83冊、源氏さころも(狭衣)16冊、曾我物語12冊、和本五経11冊、節用集7冊、和本論語3冊、手本6、千字文1などの書籍、二十二番にこきょう(胡弓)1、三味線1、唐三味線1といった楽器、さらに、二十三番にたいかう記(太閤記)23冊、源氏小鏡3冊、大和小学8冊、古今集2冊、伊勢物語2冊、百人一首3冊、小学句読4冊、平家物語1冊、太平記21冊、あつま鑑(吾妻鏡)25冊などが並んでいる。長福院に限定されたわけではないかもしれないが、当時の教養、嗜みを表しているようだ。

結局、両者の売り立て代銀を合わせると、八十八貫七百十二匁五厘となり、これに入札外の十口代銀、すなわち唐船一艘(密輸事件で磔になった陰山九太夫・下田弥三右衛門が泉州に渡った船)の代銀一貫三十八匁(今後使えない船であり、部材代銀か?)、とたん(トタン)の代銀四十九貫七百六十八匁余ほか菓種、麝香、伽羅など合

わせた六十一貫六百十五匁余を合計すると、惣銀高は百五十貫三百二十七匁余となる。

これから払い方(支出)三十一貫五百五十四匁余を差し引いた銀百十八貫七百七十三匁余が上納された。払い方の内訳に興味深いところがある。老岐へ流される長福院に対して六貫五百目が与えられ、平蔵に対しても十一貫二百八十三匁四分六厘が小遣銀として下されている。平蔵分の内、三貫目は隠岐へ行くとき、八貫百三十二匁八分は小判百三十六両(銀59匁8分替)にて奉行・牛込忠左衛門が江戸に持参し、松平出羽守(松江藩主)に隠岐へ届けてもらうよう頼んでいる。これを以てしても末次平蔵密貿易事件は、単なる公儀御法度破りというようなものではないと考えられる。

もう一つの史料「末次平蔵御闕所唐物道具刀脇指古筆御拂帳」は、高値の道具類を個別に入札にかけ、記録したものである。古筆の入札は京都で行われ、一部の道具類は江戸でも行われた。銀高は、長崎が八十一貫二百一匁六厘、京都は十五貫六百三十目、江戸は三貫百五十目となっている。

長崎入札の主要品目を、銀高六百目(金にして約10両)以上を目途に紹介したい。こうした入札は需要がある、流行りの物品には高値が付く。しかし総じて、転売を前提とするものも多いだろうから、実際の価値よりも下値で入札されたと思われる。真贋は別にそのまま表示する。なお、この入札は延宝四年(一六七六)から三ヶ年にわたって実施された。

珊瑚珠4(少宛疵有)八百目、伽羅4切七百目、青貝大箆筒一貫五百目、青磁大花入六百目、堆朱料紙箱八百六十目、芦屋釜六百目、天河肩脱茶壺八百七十目、瀬戸丸茶入六百一匁、

黄葉茶入 一貫七百八十目九分、瀬戸上底茶入 一貫八百十匁八分、井戸茶碗 一貫百五十三匁七分、青磁花入 1本 一貫五匁、染付香炉 六百五十八匁、

堆朱料紙箱 九百七十目、青貝卓 六百二十七匁、青貝卓 一貫七百三十目、八橋硯箱 七百五十八匁六分、

雪舟之絵 1幅 六百一匁、へんらん鷲之絵 1幅 八百七十六匁、唐絵 七百十匁、雪舟福祿寿之絵 1幅 六百六十六匁六分、子昂之巻物 1軸 六百一匁八分、山水周文筆 1軸 六百三十七匁、紗金 4端 一貫七百目、表具切大小 35切 二貫十五匁、巾着皮 1枚・同きれ 8 八百七十六匁、

柄鮫 八百六十目、柄鮫 2本 八百六十目、備前清光刀 1腰 一貫三百三匁、同 経家中脇指 1腰 一貫二百十匁、同 忠光中脇指 1腰 八百六十目、重國刀 1腰 一貫百五十目、盛光大脇指 1腰 一貫八百三十目、無銘乱刃刀 1腰 六百目、吉五之脇指 1腰 一貫三百七十六匁、兼貞脇指 1腰 六百目

古筆の類は、奉行・岡野孫九郎が京都奉行所を介して業者・金屋源右衛門に委託し、京都で入札が実施された。全体は次のとおりである。

手鑑 3冊 軸物 13巻 掛物 12幅 冊物 12冊
源氏物語 54帖 謡之本 百番 謡之巻本 1軸 古筆 157枚

これも真贋は別に具体例をいくつかあげてみる。

○手鑑：聖武天皇・光明皇后 真之物各 1枚、後醍醐天皇 新古今切

色紙、秀頼公 色紙、利休居士 文、聖徳太子 紺紙金泥、傳教大師 真之物、弘法大師御筆 真之物・行文字五行物、明恵上人 行文字切、俊寛僧都 歌書切、日蓮聖人 行文字三行物、隠元 手跡、紀貫之 小色紙

○後醍醐天皇 新古今和歌集 5巻（十一巻から十六巻）

○掛物：一休和尚御詠歌掛物 1幅・色紙掛物 1幅、利休文掛物 1幅 等など

これらの代金二百六十両二分を、京都の金屋源右衛門・鑑屋加兵衛が長崎に持参し、奉行所が受け取った。両替 60目で十五貫六百三十目となる。長崎・京都・江戸を合計すると、銀高九十九貫九百八十一匁六厘である。

先の入札銀高など約百五十貫目と合わせれば、およそ二百五十貫目、金にして四千七百七十両が末次氏の家産総計ということになる。繰り返すが、実質の銀（金）高はもつと高かったはずだ。

結びに代えて

『長崎港草』が記す末次氏の資産、現銀八千七百貫目余、金10万両以上、債権として銀一万貫目余は誇大で、史料としての信憑性はほとんどないが、それでも末次氏は、当時長崎第一の富豪であったと思われる。さらに、博多商人の出自である末次一族は、なお九州の中心的商都である博多とつながっており、末次の金融資産を含む、いわゆる「博多銀」^{がね}は、西日本の大名たちにも貸し付けられていた。

しかし、末次平蔵四代の系譜でみたように、三代平蔵茂房の重度骨折、代官引退を契機として末次氏の勢威に陰りが出てきたことは

十分考えられる。それより前、朱印船の海外渡航が禁止され、ポルトガル船の来航も禁止されていた。二代平蔵茂貞は、大きな打撃を受けたはずであるが、オランダ商館との取引に積極的に取り組み、唐船船主・船頭とも新たな関係を構築したと思われる。その後茂貞は病気で代官引退を余儀なくされ、京都に隠居した(『オランダ商館日記』)。茂貞の後継茂房は、代官としてこれからというとき落馬・骨折して職を辞し、若い四代平蔵茂朝が代官職を嗣いだわけである。

以下、今後の見通しだが、末次一族を含む博多系列の商人のバックには福岡藩の存在があったと考えられること、寛文・延宝期(一六六〇〜七〇年代)は長崎貿易が発展した時期で、特に寛文十二年(一六七二)の市法貨物商法は長崎に有利な貿易仕法だったこと、ために長崎商人の金融資産も膨らみ、「長崎銀」による大名貸しも可能になったと思われること、とりわけ「長崎銀」の立証・説明が必要になってくる。

寛文七年の伊藤小左衛門密貿易事件と末次平蔵事件を併せ考えれば、10年の間に起こった2つの事件は、「博多銀」から「長崎銀」への転換を、幕府・長崎奉行所、長崎商人が連携して実行に移した政策的な事件ではなかったろうか。それは幕府による長崎貿易管理強化の具体化でもあった。多分に歴史の補助線的な表現になったが、幕府や諸藩の史料で証明できないかと今後に期待している。

最後に、拙稿の発端となった「末次平蔵」史料との出会いに際して、延命寺様、高野山清浄心院様、とりわけ同院役僧の長尾和尚様には大変お世話になった。心から感謝申し上げます。また、末次氏墓碑を調査させていただいた春徳寺様にも厚く御礼申し上げます。

(長崎県長崎学アドバイザー)

〈引用史料〉

- 「肥前国長崎諸檀越過現名簿」 高野山別格本山清浄心院蔵
 - 古賀十二郎「名家墓所一覽」 長崎歴史文化博物館蔵 古賀文庫
 - 永積洋子訳『平戸オランダ商館の日記』(第二輯・第三輯) 一九六九年 岩波書店
 - 『オランダ商館長日記』 東京大学史料編纂所 一九九一〜二〇一五年
 - 渡辺庫輔ノート「春徳寺過去帳 宝物什器明細帳 墳墓ノ条」長崎歴史文化博物館蔵 渡辺文庫
 - 『長崎圖志』 純心女子短期大学 長崎地方文化史研究所 一九九一年
 - 『長崎名勝図絵』 長崎史談会 一九三一年
 - 『長崎不二贊』(長崎文献叢書 丹羽漢吉校注) 一九七六年 長崎文献社
 - 「犯科帳 延宝四年」 長崎歴史文化博物館蔵
 - 「元禄四年 末次平蔵御闕所家財諸道具長福院諸道具御拂帳」長崎歴史文化博物館蔵
 - 「元禄四年 末次平蔵御闕所唐物道具刀脇指古筆御拂帳」 長崎歴史文化博物館蔵
 - 『長崎港草』(長崎文献叢書 森永種夫校訂) 一九七三年 長崎文献社
- 〈引用文献〉
- 川島元次郎『徳川初期の海外貿易家』(大正五年 朝日新聞社)
 - 川島元次郎『朱印船貿易史』(大正十年 内外出版)
 - 福田忠昭・丹羽末廣校閲「長崎名家略譜」(『長崎叢書』大正十五

年 長崎市)

- 古賀十二郎『長崎開港史』(一九五七年 古賀十二郎翁遺稿刊行会)
- 山脇悌二郎『抜け荷』(一九六五年 日本経済新聞社)
- 奥村武「長崎と博多商人」(長崎談叢第五〇輯 一九七一年)
- 越中哲也編『長崎春徳寺史』(一九八一年 長崎春徳寺)

〈参考文献〉

- 福田忠昭ほか『長崎市史 地誌編』仏寺部・神社教会部 一九二三年)
- 武野要子「藩政史料にみえる末次平蔵」(福岡大学商学論叢 一九七六年)
- 武野要子『博多の豪商』(一九八〇年 葦書房)
- 武野要子『悲劇の豪商 伊藤小左衛門』(一九九九年 石風社)
- 永積洋子『朱印船』(日本歴史叢書 二〇〇一年 吉川弘文館)
- 岡美穂子「近世初期の投資貿易に関する一考察―二代目末次平蔵の投資・融資法―」(『石見銀山関係論集』 二〇〇二年 島根県教育委員会)
- 岡美穂子『商人と宣教師 南蛮貿易の世界』(二〇一一年 東京大学出版会)